

フランソワ・ラシヨ、マルタン・ノゲイラ・ラモス編
『帝国から帝国へ』

——十九世紀フランスと日本の最初の出会い』

François Lachaud and Martin Nogueira Ramos, eds. *D'un empire, l'autre:*

Premières rencontres entre la France et le Japon au XIX^e siècle

マティアス・ハイエック



Ecole française d'Extrême-Orient, 2021

本書は日仏修好通商条約締結からの一六〇周年を記念して、二〇一八年に東京の日仏会館 (Maison Franco-Japonaise) にて開催された国際シンポジウムの成果を紹介するものである。

そのシンポジウムでは、条約締結当時の日仏の関係が多角的に考察された。政治と外交の問題はもちろん、日本とフランスについての情報、とりわけ歴史、文化、言語などがお互いの国でどのようにして流布し、初期においてどのようにに受容されたかという問題、また日仏関係を強化するにあたり、大きく活躍した知識人や外交官といった人物の問題が中心となっていた。

本書はその問題意識を継承し、編集者の一人のマルタン・ノゲイラ・ラモスの序文によると、およそ三つの方針で構成された。

最初の二章では、外交開始以前のフランスと日本で「相手国」(l'autre) についての情報がどのルートを辿って入ってきたか、またはその受け止め方に焦点が当てられ、その収集と伝授を担った知識人たちを中心に論じられる。

クリストフ・マルケは「書物はその運命をもつ」(Habent sua fata libelli) ——十九世紀前半のフランスにおける和本の受容と東洋学への影響——において、条約の締結よりも前にフランスに流布しはじめた日本の書物(和本)に着目し、それを媒体にどのような日本情報がフランスに入り、当時の「東洋学者」にどのような受け止められ、またどのように紹介されたかを検討する。

この章でマルケは特に、欧米の日本研究の創始者とも位置付けられるイサーク・ティチングの蔵書、ついでオランダ商館での勤

務を経て、ヨーロッパに多くの和本を持ち帰ったヨハン・フレデリク・ファン・オーフェルメール・フィツセルとシーボルトコレクションの跡を追う。それらの蔵書がいかにしてフランスに渡り、どのように研究されたか、さらに蒐集家の外交においてどのような役割を果たしたかという重要な問題が大きな論点となっている。マルケは精密な資料調査を経てフランス国立図書館で新資料を発掘し、それを基に考察を展開している。これらの資料は今まで部分的にしか紹介されてこなかったし、初期の東洋学者であるアベル・レミューザやユリウス・クラブロートなどの貢献については、このようにまとまった研究もなかったように思われる。また、シーボルトとスタニスラス・ジュリアンの関係について、新出の書簡を通しての考察は、当時の日本への関心を理解する上で非常に貴重な素材である。

本書のもう一人の編集者であるフランソワ・ラシヨは「幕末・明治におけるフランス皇帝像の変遷」で、ヨーロッパの政治状況についての情報が限られていた徳川時代後期において、「ナポレオン」についてどのような言説が生まれ、それによつてどのような「ナポレオン像」が創造されたかを検討する。ヨーロッパで猛威を振るい、日本にとつて敵国であつたイギリス、ロシアとも敵対したナポレオンは、「鎖国」外交の続行を推奨する頼山陽の漢詩で紹介されたが、以降、大槻磐溪や佐久間象山のような、

海外からの脅威を強く意識していた蘭学者の漢詩で感嘆されるようになった。ラシヨによると、こうした「ナポレオン像」の形成過程を明らかにすることは、やがて外交の相手となる「フランス帝国」に対する認識を理解するためには不可欠であるが、この章では、幕末におけるナポレオンの「事跡」を徹底的に追求し、ナポレオンを題材にした多くの漢詩も見事に仏訳しており、日本研究者のみならず、ナポレオン研究者、延いては「フランス史・フランス文化」の海外的展開を研究する者にもたいへん有用な論文である。

次に検討されるのは条約締結前後の日本におけるフランス所縁の人物、宗教、機関の活動である。

野村啓介は「フランス第二帝制下の外交代表と日本国制——「ミカド」と「タイクン」へのまなざし」で、条約締結以降、対日の外交代表を務めたデュシエース・ド・ベルクールとレオン・ロッシュに着目し、二人の外交官の報告書などにおいて、当時の日本の政治状況がどのように把握・紹介されているかを検討する。特に「天皇」（ミカド）と「將軍」（タイクン）の関係に対する理解を中心に論が展開され、フランスの政治家がそれぞれの立場・役割をどのように認識し、それが外交そのものにいかなる影響を及ぼしたかが、鋭く検証されている。

中津匡哉は「イメージから歴史へ——ジュール・ブリュネの日

本滞在（一八六七年一月―一八六九年六月）において、日本に駐在したフランス陸軍顧問団の砲兵士官のブリュネを取り上げ、彼と関係が深かった人物ゆかりの資料を駆使し、文学作品や映画で描かれた「戊辰戦争に参加した青い目のサムライ」としてではなく、日本文化にさほど関心もなく、奥羽越列藩同盟とも必ずしも良好な関係を持っていなかったブリュネの実像に迫る。

マルタン・ノゲイラ・ラモスは「フランスと日本の間、地獄と天国の間――最初のカトリック信徒（一八六五年―一八七五年）」において、「開国」以降の日本人カトリック信徒の心境と宗教観を検討する。初期の信徒の多くは、いわゆる元「隠れキリシタン」であつた人たちで、新しく渡日した宣教師によつて再来した宗教を自分たちの先祖の宗教と同じものと認識した上、幕府・新政府の禁止令を押し切つて「改宗」した人々である。当時の為政者はカトリック教を「洋教」、「外教」として批判し、信者を外国の手先と見做していたなか、「改宗者」は外交上の問題を意識せず、むしろカトリック教に帰依することは先祖・村落共同体に深く根ざした自分たちの「日本人」としてのアイデンティティの再確認に繋がっていたと、ラモスは明快に論証する。

寺本敬子は「初期日仏交流における日仏学術団体――仏学会の検討を通じて」で、一八八六年に東京で創立された「仏学会」（後の日仏協会・日仏会館の原点）に焦点を当て、両国の学術交流

に貢献した人物のネットワーク構築の一面面を鮮明に描いていく。最後の二章では、当時の日仏関係に対する理解への補助線として、清朝在住の外交官の活動に焦点が当てられる。

トーマス・バレットは「清朝在外公館における外国人館員の外交活動に関する一考察――清仏戦争時のハリデー・マカートニーの活動を事例に」で、清仏戦争の際に清朝に駐在していた英国の外交官、マカートニーに着目し、公使の曾紀澤よりも彼こそが戦争中・戦争後に外交の実務を担っていたと指摘する。バレットはフランス外務省のアーカイブを駆使し、マカートニーが外国人でありながら清朝の立場を考慮し、フランスなどの外交相手にその立場を理解させ、尊重させるのに大きく務め、清仏の和解に貢献したという興味深い事実を明らかにする。

ミッシェル・ワッセルマンは「庭師の犬――駐清フランス領事ポール・クロードルがみた日本」において、日仏外交のみならず、学術交流の基礎を築いたクロードルの清朝駐在時代に焦点を当て、彼が中国在住の時に見た日本の動きに対する意見や、彼が休暇を使い初めて日本を訪れた時の感想など、いわゆる初期クロードルの日本像を描く。そこには、後のクロードルの著作で描かれる日本の美学に対する憧れとともに、当時の列強と競い合い、東アジアに進出する日本への疑念、またこの進出の行く末に対する外交官としての地政学的な鋭い眼差しも顕になっている。

どの章も非常に丁寧で精密な資料批判に基づいており、その資料の多くが本書で初めて仏訳されている。また、二人の編集者は序文と後序で各論の位置付けとその展望を明確に提示し、各章の他の章との関連性をもの確に強調している。このようなテーマ設定の広い編著では珍しく、索引が設けられ、参考文献は各章ではなく、一箇所に集約されており、これもある意味では各章の関連を浮かび上がらせる装置にもなるであろう。疑問点としては最初の二章が本書の半分を占めていることが挙げられるが、どちらも力作であり、逆にいえば本書の目玉ともなっている。

このフランス極東学院出版の「*Erudes Thématisques*」(テーマ別研究)シリーズはおよそ三十年前から刊行されているが、東西の最先端の研究成果を紹介し、また日本や中国という一つの地域にテーマを絞ったとしても、必ず周辺からの眼差しを取り入れるように仕込まれている。さらに紙の質も含め書物としてのクオリティーが非常に高いことも特筆すべきである。本書もこのシリーズを代表する一書として、今後の日仏交流史の一つの基礎文献と十分になり得るものである。

